

## 私が辿つた道

石川県 山崎 勇 作

満州へ

東京中野高等無線電信学校在学中の昭和十四年十一月初旬のある日、学生監から「満州国から無線通信士の募集に来ている。十二月に国家試験を受ける者で、我れと思わん者は腕試しに受けてみる、合格しても行きたくない者は行かなくてよい」と言われ腕試しのもりで受験したのがきっかけで、満州国治安部警務司の技術官として採用され、同年十一月二十三日、国内の各無線学校から採用された同僚二十四人と共に、閔釜連絡船で朝鮮を経由して渡満、新京中央警察学校に於て約一か月間、満州事情や北京官話等の講習を受け、十二月二十日牡丹江省警務庁勤務を命ぜられて赴任した。

技術官として採用された私達だったが、各省へ配属

されたその時から行政官たる警察官をも兼官となった。

牡丹江に赴任してからの一年ほどは、無線通信という特殊性もあって、日曜祭日はなきに等しい勤務ながら、それなりに青春を謳歌していた。

昭和十五年十一月十四日、綏陽県に新設された秋皮溝国境警察隊勤務を命ぜられて、遠く人里離れたソ満国境の二十一号界標下で、国境警備の任務に就いた。

冬は雪深く、食糧輸送もままならず、厳寒時には零下四十度を越す日も珍らしくない仙境で、勤務はともかく、百余人の隊員中、日本人は隊長以下六人、他は総て中国人と云う中で、殆ど中国語の話せなかつた私は、言葉覚えるのに苦しまなければならなかつた。漸く言葉にもそれほど不自由を感じなくなつた。

昭和十七年六月十日、再び牡丹江省警務庁勤務を命ぜられた。牡丹江に戻り、四畳半一室の独身寮暮らしながら屈託のない日々を過していた。

昭和十八年十月中旬のある日、「明日牡丹江に着く」という発信人不明の電報が届き、翌日の午後には親父

が若い娘を伴って現われ、「お前には何も知らせてなかったが、家では結婚式を済ませて来た。何事も縁だと思つて仲良くやれ」と言う。呆氣に取られて開いた口が塞がらない。

突然に降つて湧いた嫁騒動に、空いた官舎もなく警務庁無電室長の紹介で、中国人商家の一室を借り受けて新婚生活を始めたものの、不慣れな土地で全く言葉の解らない妻が、中国人社会に混じつての生活には、戸惑うことばかりの毎日のようであつた。漸く妻も土地に慣れ、大家の中国人達とも親しみを増しかけた昭和十九年四月一日、寧安県二道河子警察署勤務を命ぜられ、妻を伴つて赴任した。

二道河子警察署は、図佳線紫河駅より牡丹江河に沿つて走る森林鉄道の終点二道河子までを管内に持ち、人口二万、朝鮮族や、白系ロシア人部落もあり、営林署や伐採事業及び、鉄道事業に従事する日本人も多く、二道河子警察署に着任してからは、当然のことながら主管の無線通信に併せて、戸籍や兵事の事務も管掌する他、警察全般に亘つての監督責任をも有することに

なり、松根油や山葡萄から取る酒石酸の生産、供出農産物の出荷督励等と勤務は多忙を極めていた。

そんな中で、昭和二十年二月三日、長男が誕生し妻が床離れするまでの間ながら、勤務の合間をぬつての妻子の世話はまさに猫の手でも借りたい思いだつた。

#### ソ連の侵攻

牡丹江省警務庁並びに寧安県警務科へ出張中の昭和二十年八月九日午前二時過ぎ、宿泊先の寧安県無電主任染川定夫氏の官舎でけた、ましく鳴り響く電話のベルに電話口へ出ると、警防股長よりソ連軍の越境侵攻を知らされ「君は帰る気か。帰らぬ気か。帰らぬとすれば二道河子警察署管内にある防空監視哨の指揮は誰が取るのだ。帰るのなら早くしないと牡丹江行の列車がなくなるぞ」と怒鳴られ「列車の手配を願います」と言つて電話を切ると染川氏の奥さんに世話になつたお礼もそこそこに染川氏と官舎を飛び出し、警務科に駆けつけると、「おつ来たか、列車の手配は出来ている」と言い、今後のことについて打ち合せていると人事股長が入つて来て「これは大使館兵事員の身分証明書だ。

これがあれば何かと便利だから持つて行け」と渡してくれたのでそれをポケットに捻じ込むと警務科を後に寧安駅に向かって駆け出した。駅では駅長が駅員を集めて訓示中であつたが私の姿を認めると「あれです」とホームの一番向う端に蒸気を吹かしている貨物列車を指し示したので、ホームを横切つてその列車に飛び乗るや列車は直ちに走り出した。

午前九時過ぎ列車は牡丹江操車場に到着したが、私はまだ牡丹江駅から佳木斯線に乗り換えて紫河迄行かねばならぬ。牡丹江駅までの間を線路伝いに駆けながら、警務庁無電室長の木村忠男氏と今後のことを打ち合せて置く必要があると思ひ、牡丹江駅前の派出所に飛び込み木村氏に電話連絡しようとしたが、警務庁は北晴山の防空壕へ引越し中とかで連絡が取れず、そうこうしている間にソ連機の襲来を告げる空襲警報が鳴り渡り駅前の防空壕へと避難した。

何時発つとも知れない列車を待ちながら午前中一ぱいを駅舎と防空壕の間を往復して過ぎさせられてしまつた私は、正午過ぎ大使館兵事員の身分証明書を駅長

に示して、何とか列車を出してくれるよう頼んだが「空襲が治まるまで待つてほしい」と言われて更に待つこと二時間余り、午後三時頃再び駅長に頼み込んだ結果「漢陽信号所の方へ行つていてくれたら機関車を廻す」と云うことで話が決り、牡丹江駅から西へ約二キロほどの地点に在る漢陽信号所へ向けて急いだ。漢陽信号所に着きホツとする間もなく機関車が一両入つて来たので乗せて貰ひ、午後五時半頃漸く紫河に到着した。

紫河に着くと分駐署に駆け込み、署長や各分駐署に電話でソ連軍の侵攻を伝え、防空監視哨の二十四時間監視態勢と治安維持の確保等について指示し、次いで管内唯一の交通機関である森林鉄道の責任者に対し、保有する全機関車を何時でも出動出来るように整備し、緊急の場合に備えて機関車を一両宛各駅に配備待ちさせるよう要請し、分駐署員に今晩夜通しで二道河子へ帰るから機関車を一両準備してくれるように頼む。

分駐署員が用意してくれた夕食を食べにかかった。

丁度夕食の終わった午後十時頃機関車の準備も出来たので、急いで駅に行き機関車に乗り込むと紫河を発し、途中頭道河子機関庫に立ち寄り、機関車の整備状況や各駅への配備状況を確認して、十日未明漸く二道河子に帰り着いた。

機関車を降りると警察署に直行し、当直員に防空監視哨の監視態勢をただし、全署員の出署示達を指示して官舎に帰り、妻が忙しく作ってくれた朝食を摂ると駆け足で署に向かった。署では署長以下全署員が私を待ちかねていたので、改めてソ連軍の越境侵攻を伝え管内の治安維持や民心の安定、各種情報の収集等今後の警備態勢について指示しそれぞれの部署に就かせた。

午前八時寧安県無電室とその日第一回目の交信に入り、その後の状況を尋ねたが、国境附近は混乱し、無電は絶えていて詳しい情報は入手出来ずにいるのとことだったが、次の交信を九時と定めて交信を終えた。

午前九時第二回目の無電交信に入ると待ち兼ねていたかのように、至急至急のサインと共に「第二国民兵

以上の兵籍にある者は全員召集」との指令が飛び込み、続いて「今回の召集は国家非常事態なるため、召集令状を発する暇はなく、令状は発しないが、全員を牡丹江兵事部に参集せしめよ。なおその際、各自家にある日本刀、槍、薙刀、木刀等武器となり得る物はすべて携行せしめよ」との指令である。受信し終ると同時に召集の主旨、指令を各該当者に伝達させると共に、こうしたことを予期して各駅に配備待機させてあった機関車を一斉に動員して応召者の輸送に当らせた。

この最後の召集で管内から応召した者の中には、我が署に於ても本署勤務の若山、紫河分駐署の大場、三道河子分駐署の溝口の三君が応召し、日本人幹部は私人となった。

昭和十六年春、秋皮溝国境警察隊に勤務していた私は、徴兵検査のため検査場に赴いたが、徴募官より「君は軍隊同然の国境警察隊に勤務しているので兵役は免除する」と言われて検査もせずに帰されたので兵籍はなかった。

管内各地には応召された方の家族や年輩の方等、日

本人が約二百五十人ほど住んでおられるが、この方達の生命身体の安全は今や小さな私の双肩に重くのしかかって来た。

応召された方達の見送りを終えた午後三時頃、伐採業者川上組の駐在員の方にお願ひして同組が保有している地下足袋をすべて扱出して貰うと同時に、二道河子在住の日本人の方に私の官舎前に集まってもらい、緊急の場合何時でも避難出来る様、携帯食糧や身の廻りの物を準備して置くよう申し渡すと共に、川上組から扱出して貰った地下足袋の中からそれぞれ足に合わせて各自二足ずつ持ち帰って貰った。

その夜、我が家でも妻が生後六か月になる長男の下着やオムツ、粉乳等を手縫いの背負袋に詰め何時でも避難出来るよう準備していた。

明けて八月十一日午後一時過ぎ、前日応召した者の内、我が署員三人を含む約半数近くの者が牡丹江兵事部より「管内の軍事目的に使用されるような施設はすべて爆破した後、警察署兵事員の指揮下に入り、その指示に従って最寄りの部隊に編入せよ」との命令を受

けて帰されて来た。その日の夕刻より十二日朝にかけて「ソ連の戦車は我が前方に迫りつゝ、あり」「後方山岳地帯に武装匪賊が現われた」「隣接の警察署は全滅した」等と様々な情報が入って来た。勿論これ等の情報はすべて確実なものとは思わなかったが、ソ連軍の進撃は事実であり、それに伴う治安の悪化は予想に難くない。今の内に日本人の方達を新京方面に避難させようと決意した。

だがもはや、牡丹江經由で新京方面に向かうことは無理だろうと思ひ、羊險溝まで森林鉄道を利用し、それから先は徒歩で横道河子まで避難させ横道河子から先はその時の状況に応じて対処しようと考えた。がそれにしても一応県長の承認を得て置こうと思ひ十二日午前、第一回目の無電交信の際「管内在住日本人の安全を期するため、横道河子方面に避難させたい」と要請したが、県からの回答は「貴殿が言うように当方は事情逼迫しおらず、現在のままにてあれ」と言う指示である。

私は事態が悪化してからでは悔いを残すことになる

と思ひ、午前中一ぱい要請を繰り返したが一向に埒があかなかつた。そこで斯くなる上は独断で行動を取るのみと意を決し、県に対し「これより独断で管内在住日本人を横道河子方面に避難させる。依つてこれにて無線連絡は打ち切る」と打電したところ「それでは貴殿の言うように日系住民は横道河子に向けて避難せよ。但し貴殿は最後まで現地に留まり事後処理に当れ」との指示である。

交信を終えた午後一時半頃、各分駐署並びに各事業所に対し「管内在住日本人全員を横道河子經由で新京方面に避難させる。十三日午前零時を期し二道河子より避難列車を出発させるにつきそれまでに全員を二道河子駅に集結させよ」と指令を出し、又川上組駐在員の方にお願ひして、同組が保有する白米等の食糧を貨車一両分扱出してもらひ、これを貨車に積み込むと共に警察署の武器庫にあつた小銃及び弾薬を五十人ほどの男子に携帯して貰ひ、目的地に着くまで婦女子を警護するよう頼むと後始末のため、三道河子分駐署の溝口君と宮林署の荒関氏、川上組の葛原氏の三人の方に

私と一緒に残ってもらつた。

#### 避難開始

八月十三日午前零時避難列車は予定通り二道河子を發つて行つた。後に残つた私達四人の者は、朝まで私の官舎で仮眠を取つた後警察署に行き、暗号書や重要書類等すべて焼却処分し終つて、私は楊署長とマレンコフ隊長に別れの挨拶をしようとそれぞれの部屋を訪れた。

そもそもこの二道河子警察署には私達四人の日系署員と、親家で日本語の話せる楊署長以下中国人署員が百二十人、それにマレンコフ警佐を隊長とする白ロシア人の森林警察隊員八十人がいる。楊署長もマレンコフ隊長も力のないうつろな顔つきで「私達も一緒に連れて行つてくれませんか」と哀願するように言われたが私は「今まで共に手を携へ国家のためにと尽くして来たが、今や情勢も立場も異なつて来た。明日をも知れぬ我が身で、貴殿方やその多くの家族の方達を日本人と同じくどこへ行くか当てのない苦難の道を歩ませることは絶対に出来ない。貴殿方は今後の情勢を

見極めた上、最善の方法を取ってほしい」と言ったところ「解りました」とやや元氣を取り戻したように見受けられたので、お互いの無事を祈り固い握手を交して別れた。

楊署長やマレンコフ隊長とは信頼し合った仲であり、特に中国人幹部署員とは、公私共に親しく交わり、献身的な協力を得ていたばかりでなく、管内在住日本人の方達を無事避難させることが出来たのもこれ等の人達の協力の賜物であり、それだけに別れは辛かった。

すべての後始末を終えた私達四人は午前十一時頃先に出発した人達の後を追って二道河子を出発した。途中、頭道河子までは森林鉄道を利用し、それから先は徒歩である。羊臉溝を出外れたところまで行くと大きな河が流れていたが、架けてあつたはずの橋がなく、先に行った婦女子はどうして渡つたらうかと思ひながら、股まで来る水の中を浅いところを選んで渡つた。こうして行く先き先きで大小合わせて五、六本の河を渡り切つた頃には日はとつぷりと暮れ、やがて小さな中国人部落に辿り着いたので、村人の案内で屯長に会

い「今晚屯公所で泊めて貰えないだろうか」とお願いすると、心よく応じてくれ、屯公所に案内してくれると共に四、五人の村人を呼び集めて火を焚かせ「夕食はまだだろう」と夕食も作って食べさせてくれた。

食事が終ると屯長に「明朝は早立ちするのでお会い出来ないが大変お世話になりました」とお礼を述べると「それでは今晚の中に何か朝食の準備をさせて置こう」と言つて帰つて行かれた。床に潜るとオンドルの温かさが屯長や村人達の心の温かさと重なり合つて疲れた身体に心地よく伝わつて来た。

翌朝まだ薄暗い中に起き出し、身支度をしてると昨夜の村人が炊き立ての粟粥とお茶を持って来て「これを食べて行きなさい」とテーブルの上に並べてくれた。私達は厚意の粟粥を食べると厚くお礼を述べて屯公所を後にした。

途中行き交うた中国人が「もつと先の方だが貴殿方と同じ日本人の一团がいた」と教えてくれ、人数や身なりからして二道河子からの一行と思われたので歩を早めた。午後一時頃横道河子から山に向かつて二十二

キロの近藤産業の事業所附近にいた中国人の主婦に「日本人の一団が通らなかつたか」と尋ねると「今朝七キロ地点の方に行つた」と教えてくれたが腹ペコの上に雨も降つて来たのでその主婦に「何か食べる物があつたら分けてほしい」とお願いして焼餅子を分けて貰ひ空腹を満すと七キロに向かつて急いだ。

午後六時頃七キロに辿り着き道端にいた中国人に「日本人の一団が来なかつたか」と尋ねると「近藤産業の集会所にいる」と教えてくれたので集会所に行き、広間と思われる部屋のドアを開けて足を一步踏み入れた途端「ウォー」と一斉に喚声がり拍手が沸き起つた。予期しないところでの再会合流である。

一同が語るには、羊脛溝に到着し、列車から降りると日本軍の一小隊と出会い「貴方達の背後にはソ連軍が迫っている。我々はソ連軍の進撃を阻止するため、すべての河に架けてある橋を爆破しに来た。早くこの橋を渡らないとすぐに爆破する」と言われ、貨車に積んで来た食糧を取り出す間もなく身の廻りの物を抱えてやつとの思いで橋を渡ると、すかさず爆破し、その

後もここへ来るまでに、幾つかの橋は私達が渡つた後で爆破してしまい、どうにかここまで来たが食糧がなくなつて動けず貴方等の来るのを待つていた、とのことである。

私は一同の方達に「明朝食べる食糧はどうなっているか」と尋ねると「この事業所において高粱を少し分けて貰つたので高粱粥にしよう」と準備してある」と言うので「それでは明朝食糧調達に横道河子へ行くから御苦労でも運搬要員として男の方十人ばかり私と一緒に持つてほしい。誰が行くかは相談して決めて置いてほしい」と申し渡し、長男を抱いて横になつた。

翌十五日朝十人の男の方達を連れて食糧調達に横道河子に向かい聚落に入ると横道河子警察署の増田警務主任が制服を付け刀は提げているものの、制帽も被らず靴も履かない裸足の異様な姿で来るのと出会つたので「増田さんその格好は」と尋ねると「昨日警察署を焼いてしまいこの格好だ」と言う。増田氏に食糧調達の協力を願おうと思つて来たのだが、この様子では無



理だから駐屯軍司令部に掛け合おうと思ひ増田氏と別れると駐屯軍司令部へと急いだ。駐屯軍司令部に着き衛兵所で名刺を出し、司令官への面会を求めると伴ってきた男の人達をそこに残して別棟の奥まった部屋に案内された。

暫くして応対に出た参謀が地図を広げて私達が来た方面の状況を尋ねたので、二道河子からの状況を詳しく説明し、食糧を少し分けて貰えないかと要請した。参謀は話の合間に時々別室へ行つて何か協議しているようだったが「我が方にも食糧がないので村公所に掛け合つて貰えないか」と言うので仕方なく帰ろうとすると「折角来られたのに申し訳ない、又何かあつたら連絡します」と言つて部屋の外まで見送つてくれた。

軍司令部を出て村公所に行き、村長に対しこれまでの経緯を説明して食糧の放出を願ひ、「食糧は配給だから」と放出を渋る村長に「県長の承認を得ている」と粘つて、漸く百八十斤入り麻袋一袋の精白米を分けて貰ひ、お礼を述べて村公所を出た。男の人達は麻袋のところどころを縄で縛り六人が交互に入れ替つて運

ぶことにして、横道河子駅前まで来ると空襲警報が鳴り出し、男の人達は大切な食糧を道端に放り出して防空壕へと走つた。

空を見上げると機影も見えず爆音も聞こえない。敵機の襲来迄にはまだ少し時間がありそうだと思つたので、防空壕へ潜り込んだ男達に「駅の近くでは危ないから少しでも遠ざかるんだ、まだ少し間がある早く来い」と叫んで防空壕から引つ張り出し、道端に放り出してあつた米を持ち上げさせ、駆けるようにして村外のロシヤ人墓地まで来ると、爆音と共に小さな機影が三機見えたので「逃げろ」と叫んで墓地近くの山の雑木林へ潜ませた。

皆が雑木林へ身を伏せた頃敵機は駅近くへ爆弾を投下し、我々の頭上で三機が交互に旋回しながら私達が潜んでいる雑木林目掛けて機銃掃射を浴びせて来た。へばりつく様に伏せている身の周りを無数の銃弾がシュッ、シュッと音をたてて山肌に刺さり、木の葉がハラハラと舞い落ちる。中には頭を掠めるようにして土の中へめり込んで行く弾もあり「我が命数もこれまで

か」と観念したがほどなく敵機も去り、誰一人として怪我する者もなく、午後五時半頃七キロ地点に戻った。

七キロ地点では二道河子からの人達は全員無事だったが近藤産業の男の方が爆弾で顔半分が吹き飛び即死されたので、そのまま埋葬したと埋葬個所を教えてくれたので、一握りの野花を手向けて冥福を祈った。

私は一行の方達に明朝ここを出発するから今日持つて来た米は、夕食に食べた後握り飯にして今夜のうちに出発準備をして置くよう申し渡し、明日からの行動を思案したが情勢の把握が出来ない今、その時その時の状況に応じて対処するより外に方法はないと思ひ横になった。

その夜お腹の大きかった婦人が産気づき十六日未明出産し母子共に元気だったが、これから先が大変だろうと思つた。

朝食も終ろうとしているところへ駐屯軍司令部からの伝令が私を尋ねて来て「ここは危ないから直ちに横道河子へ下るように」との軍司令官の伝言を伝えて帰って行つた。丁度横道河子の方へ下る準備をしていた

ところでもあり早速出発することにした。

明け方お産した婦人と子供を運ぶため戸板で担架を作り、屈強な男の方八人に運搬方をお願いし、この方達には運搬に容易な通常の道路を通つてもらい、残りの一行は私が引率し空襲に備え遮蔽物の多い山道を通つて横道河子に出ることにした。山道は結構登り坂もある上に途中二回の空襲で雑木林の中へ退避する等、幼い子供連れの婦人方には過酷な行軍で中には身の廻りの物を捨てる者もあつたが全員無事で、午後二時頃横道河子に到着した。

横道河子に着いて見ると、駐屯軍は既に撤退し駅のホーム近くには機関車のない客車が二本ばかり入つていたがいずれも窓硝子は破れ、頭や顔に包帯を巻いた傷ついた人達が僅かに乗っているだけだった。

駅の構内を見廻すと向こう端に機関車がハルピンの方へ向いた空の貨物列車が一本停車していたので、中国人の機関士に「ハルピンの方へ行くのか」と尋ねると「行く」と答えたので「乗せてくれないか」と頼むと「空だから乗つてもよいが何時出るか解らないぞ」

「と言う「それでもよい」と言い置いて一行の方達を呼び寄せ、貨車に乗り込ませていると、牡丹江方面から無蓋貨車に鈴なりに避難民の乗った列車の近づいて来るのが見えたので、私は咄嗟に線路に飛び出し列車の前に立ちほだかり列車を止めると、轍の立っている車両に駆け寄り、輸送指揮官らしき方に名刺を差し出し「食糧がなくて困っているが何か少し恵んで戴けませんか」とお願いすると「我々も避難途中で食糧も沢山はないが困っている時はお互いだから」と二カマスの米と一袋の白麵を分けて下さった。

こうして途中一面波の駅でも避難列車を止めて、米や白麵を恵んで貰って一行の食糧を補給し、又葦河や阿城の駅では、機関車の水を貰って飯盒炊きをしながら横道河子を出てから三日がかりで漸く八月十九日の朝、列車はハルピン駅構内に到着し機関士から「ここで終りだ」と告げられた。

私達はこの機関士のお陰でハルピンまで来れたことを感謝しお礼を述べて別れると駅舎の方へと向かい駅に着いて初めて日本の敗戦と十五日に終戦になったこ

とを知り愕然とした。

駅の出口のところではハルピンの南崗区に「牡丹江省辦事処」が設けられてあるから牡丹江方面から来た人は連絡されたい」と書いた貼紙が目につき、駅前の一角に一行の方達を待たせ置くと辦事処へと急いだ。辦事処には牡丹江省警務庁や牡丹江市警察処にいた馴染の顔が揃っていて「寧安県から来たのは君が初めてだから寧安県戦災者対策本部を作って路頭に迷っている仙洞開拓団の人達の面倒も見てくれ」と言われたので「避難民を收容する場所があるのか」とたずすと「困ったことにそれがない」と言うので彼方此方を探して貰った結果、一部の中国人警察官が治安維持会を作り、その本部にしているハルピン地方警察学校へ入れて貰うことに決まった。だが避難民の方達の食糧を購入する金は私にはなかつたので、辦事処にお願いして自分の食糧費として五千円を借り受けると一行が待っている駅へと急いだ。

駅へ向かう途中武装解除を受けた日本軍部隊の前を通ると一人の将校が、つと私に歩み寄りそつと一枚の

印刷物を手渡してくれたので目を通すとソ連軍が出した日本人に対する戦犯手配書で、該当項目五項目が列記してあり、これまでの私の身分や職務内容を此の項目に照らしで見ると五項目すべてに該当し、一項目として外れるものがなかった。彼の将校は私がまだ二道河子を出たままの武装した姿であるのを見て、それとなく氣遣ってくれたものと思われる。

駅前の一行の許に戻ると、近藤産業関係の方達はハルピンの近藤産業本社へ行かれたということだったので残っていた人達を連れて警察学校へと向かった。

警察学校の正門を入り治安維持会の看板が掛けてある建物の前まで行くと、年輩の日本人の幹部教官が出て来られて、校舎の広い一室に案内してくれ「私の事後処理も終り明日から来ませんが、治安維持会の連中にはよく話してあるので心配なくして下さい。この棟の奥には炊事も薪もあり、赤い高粱が一トンほどあるから食べて下さい、又皆さんが入られた部屋には毛布も少しあるから使して下さい。」と親切に言ったださった心遣いを感じ、お礼を述べた後、戦災者対

策本部設置の話をすると「看板が必要でしょう」と言っただきな紙に「寧安県戦災者対策本部」と大書して下さったので早速板戸に貼り校門前に掲げた。

昼食の時、一行の方達に今晚から学校の炊事場を使って、共同炊事にすることを提案し、又四、五人の方に辨事処から借りた金で、食糧を購入して開拓団の方達と人数に応じて分配するようお願いした。

#### ハルピンの難民生活

警察学校に落ち着いて一、二日は平穩に過ぎたが、三日目の夜、校門横の日本軍の官舎で手榴弾による自決騒ぎが起り、翌日の夕暮れには銃を持ったソ連兵三人が私達のところへ押し入り、金品を強奪して行ったので翌二十三日朝、戦災者対策本部の看板は取り外した。その日、街ではソ連軍が日本人狩りを始めたと言う噂が流れたので、男達には外出を控えるよう注意していたが、正午過ぎ治安維持会から「十六歳以上の男は全員正門前に集まれ」と命ぜられ、反抗することも出来ず集合すると「今からお前達をソ連軍に引き渡す」と宣告され、武装警官に護送されて道里警察署の留置

場に監禁された。狭い独房に十人ほど詰められ座ることも出来ず立ったままだったが二時間後「正式命令が来てなかった」として解放された。

だがその日の夕暮れ、又もソ連兵が押し入り妻が抱いていた長男の喉に指揮刀の刃先を突きつけて一回の方達から金品を強奪して行つた。日々物騒になつて来たので我々も何か自衛策を講じねばと思つていた矢先の二十五日、警察学校はソ連軍に接收されて治安維持会は去り、代つてソ連鉄道部隊が入つて来たので、私達は部隊と同居することになった。

鉄道部隊と同居を始めて四日目の午後、自動小銃を手に煉瓦塀を乗り越えて二十人余りのソ連兵が私達のところへ乱入し、毛布や刃物類を屋外に持ち出すと共に、十六歳以上の男達全員を連行して校門を出ようとしたが、同居している鉄道部隊の隊長の知るところとなり、解放されてことなきを得た。

鉄道部隊は日を追つて隊員が増加し、九月に入ると今までの棟を追われて別棟の床板張りの大きな部屋に移されたが、九月二十日夕刻「二時間後にはここを

出ろ」と宣告された。勿論我々には行くところなどある苦もない。そこで隊長に「何処か入るところを探してくれたら今すぐにでも出る」と言うのを傾けて部屋を出て行つたが、一時間ほどして戻つて来ると「近くに入るところがある、女や子供も多いし男は歩いていると危ないから」と部隊のトラックで警察学校から西へ三百メートルほど離れた「白雲隊舎」と表札の出ている建物に移された。

白雲隊舎に移つて三日目から、男達は鉄道部隊の要求で使役として部隊内の諸々の作業に駆り出され、昼食には薄い黒パン二切れと一皿のスープで毎日午後五時まで働かされた。又この頃より白雲隊舎は避難民の収容所となり、ハルピン日本人会から、連日避難民が送り込まれるようになって来たが、私は当初からの経緯もあり引き続き収容所の代表として世話することになった。

収容所は避難民が増加するに従い病人が出はじめたのに加え、婦女暴行を目的に乱入するソ連兵を追い出すのに苦勞せねばならぬ日も幾夜が続いた。こうして

十月に入ると大人も子供も栄養失調や得体の知れない熱病、発疹チフス等で倒れる者が日毎に続出し、特に発疹チフスの蔓延は甚だしく、年輩の方や子供の不帰となられる方は日を追うて増加し、十一月に入ると五歳以下の子供達は殆ど亡くなって行ったが、医師もおらず薬品もない収容所では為す術はなかった。そんな折、私も発疹チフスに罹り高熱で意識不明の状態が数日間続き、我に返った時には傍にいた筈の長男は既にこの世の人ではなかった。

十二月も半ば過ぎると鉄道部隊の使役もなくなり、又ひと頃やかましかったソ連軍による日本人狩りも影を潜めたので、男達は働き口を求めて毎朝夜明け前から中国人手配師の許に群がった。勿論この頃には誰れも彼れも有り金もなく生きるためには必死だった。私共夫婦も長男が亡くなったことから妻は中国人のところまで煙草の手巻や雑役婦として働き、私は収容所の世話をする傍ら、中国人家庭の便所掃除から水道の穴掘りや、ソ連が満州から持ち出す大豆、小麦粉の貨車積み、毛皮類の梱包等の労働で日銭を稼ぎ生活を

支えていた。

ハルピンの冬は寒く、平均気温零下二十八度という中で暖を取ることはおろか、着る物もなく人と人の体温と気力でしか寒さを凌ぐ術のない収容所では、体力の限界は死を意味し、多い時は日に四、五人の方が亡くなって行ったが、幸いと言おうか、収容所の隣は西本願寺のハルピン別院だったので、亡くなられた方達はこの寺の境内に埋葬させて貰っていたが、年も明けた三月のある日、ソ連軍の命令で遺体はすべて掘り上げられてどこかに運び去られ、それ以後はこの寺の境内での埋葬は許されず、遺体収集車が巡回して来るまでは収容所内の廊下に安置するより外に方法はなかった。

一週間に一度私は亡くなられた方の名簿を持ってハルピン市政府を訪れ、死亡確認証明を貰っていたが、暖かくなるにつれ死亡される方も減少し、発疹チフスもやや小康状態になって来たが、四月に入ると八路军への篤志看護婦提供の問題が持ち上り苦惱させられた。だが従軍看護婦として収容所より送り出した方も

八路军に従って、ハルピンを出発してから八日目に帰って来られ、それ以後は特別なこともなく推移し、私も日稼ぎに出る日が多くなつて行つた。

七月に入ると南の方では避難民の日本送還が始まつており、逐次ハルピンの方にも及ぶだろうから準備にかかるようにとの達しが日本人会からあり、收容所の人達の名簿作りや、日本人会との連絡に追われる日が多くなり、七月二十三日には朝から妻にも手伝わせて名簿の整理をし、正午過ぎ日本人会で打ち合せを済ませて戻ると、收容所内は人の動きもなく静まり返つて異様な雰囲気なので「どうしたのか」と尋ねたが、妻は勿論、誰一人として答える者もなく首をうなだれていたが、漸くして部屋の長老である小野寺さんが「銃剣付きで武装したソ連兵五人が通訳を連れて入つて来て、山崎はいないか、隠すためにならんぞ」と各部屋をひっくり返すようにして搜索すると帰って行つたが、彼等が出るのと貴男が入つて来るのが一緒だったので皆が驚いて声も出なかつた」と話してくれた。

私は以前、国境警察隊に勤務していた頃、梨樹鎮の

特務機関を案内して、二十一号界標からソ連にスパイを潜入させたことがあり、又ソ連から潜入したスパイを逮捕したこと等もあつて、ハルピンに到着した日、日本軍将校からソ連軍が出した戦犯としての手配書を手渡された時からこうした日のあることは覚悟はしていたが、苦難を乗り越えて今日まで来た收容所の方達には私個人のことでは迷惑は掛けなくなかつた。迷惑を掛けた詫びに各部屋を廻つて頭を下げながらこれ以上迷惑を掛けないためには收容所を出るより外に道はないと考え、新京方面への南下を決意した。

その夜、收容所の主だつた方達に集まつて貰い「皆さんに迷惑の及ばないよう收容所長を辞めて、ここを出たいので代りの所長を選んでほしい」とお願いし、翌日後任の所長に名簿や死亡確認等の引き継ぎを終えると南下の準備にかかつた。

私達夫婦の南下を知つた收容所内では、一緒に連れて行つてほしいと申し出る人達が沢山いたが、自分は追われる身で危険が伴ふことや、もう暫くで引き揚げが開始されること等を話して大部分の方に思い留まっ

でもらったが、小野寺さん一家や金戸さん父娘、林田さん一家等死なば諸共一蓮托生だと後に退かない方が五十人ほどいたので仕方なくこの方達とは御一緒することにした。

#### 新京への逃避行

七月二十五日、死なば諸共と同行を切望された方達五十人と共に後に残っておられる方達に別れを告げると白雲隊舎を後にした。

初めは途中迄でも列車を利用させてもらおうと、八路軍司令部とハルピン市政府に掛け合ったが埒が明かすハルピンの郊外まで歩き、郊外で三頭引きの馬車五台を雇って分乗すると、徳恵近くの松花江北岸を目指してハルピンを後に馬車を走らせた。

道中の安全を確保するため馬夫達に治安に対する聞き込み等させながら、パンを噛り胡瓜で喉を潤し、馬車の上でもごもに仮眠を取り合い、昼夜兼行で馬車を走らせたが、何分木影一つない広野を灼熱のような太陽に照りつけられて、人も馬もへばり出したので、多少廻り道になることもあったが、身の安全と疲労を

やわらげることを考えて途中二十七日の夜と二十九日の晩は八路軍の駐屯する営舎内や、宿営地で泊めてもらい、湯茶を恵んで貰ったりしながら三十一日午後まだ日の高い頃、目指す松花江畔の部落に到着した。

部落に到着すると馬夫達に約束の私達一人につき二百円の運賃を支払うと馬夫達は松花江を渡る渡し舟の船頭を探して来てくれたので船頭に「ここにおる者を向こう岸まで渡してくれないか」と頼むと「この河を境に国府軍と八路軍が戦っており、河を渡る者は両方から撃たれる、そんな危い仕事は駄目だ」とにべもなく断られたが「あっそうか」と後には引けない。粘りに粘って頼み込むと「日の明るい間は駄目だ。日暮れを待つて舟は出すが河の中にある中州までだ、それから向こうは浅いから歩いて渡れ」と言い「危ない仕事だから舟賃は一人二百五十円だ」と言う。ちよつと高過ぎると思ったが断られては元も子もないので、要求通り支払うことで話が決まった。

部落は河面から十メートルくらいの高さのところになり、松花江や対岸の様子がよく眺められる。河中は



八百メートルくらいのものだろうか、中州も河の真中よりは向こう岸近くに広がっている。大体の河の様子を眺めると大地に身体を横たえながら日の落ちるのを待った。夕闇が漂うと私達は水辺へ降りて舟を待った。辺りが全く闇に包まれた頃、三艘の河舟が来たので五十人の者はそれぞれに分乗し、舟は水音を立てないようにして進んだ。

中州に着くと昼間見定めて置いた中州の向こう端へと急ぎ、着衣を脱ぐと浅いところを探しながら全員対岸の葦の生い茂った岸辺に辿り着き、やれやれと思った瞬間、後方の対岸から私達の方向目掛けて数十発の銃声が聞こえたので慌てて、背丈以上にも伸びた葦原に駆け込み、濡れた身体を拭う暇もなく、衣服を着るとお互いが離れ離れにならぬ様声を掛け合って走り出した。

どのくらい走っただろうか、銃声も止み走り疲れたので立ち止まって皆の揃っているのを確め、葦原を抜けようとした途端、行手の叢の中からパンパンと五、六発の銃声がしたので身をかがめて前方を透かして見

ると五、六人の国府軍兵士が銃を構えて近づいて来ると「お前達は何処から来た」と詰問され「お前達は密航者だから身体検査する」と言われてそこから西の方に下った柳や榆の木が生い茂った小高いところに連れて行き、持ち物を広げさせると調べ出したが、自分達の欲しいと思う物は掠めて行った。

私達は、新京への道程で最も難関と思っていた松花江を渡り終えたことでもあり、少し休もうと話し合っていて、この夜はここで野宿することにした。

明けて八月一日身支度を整えると徳恵へ向かって歩き出したが、道を進むほどに葦原の彼方此方から中国人達が出て来て私達の前後を同じ方向に歩いて行くので、これ等の人達の後について歩くことにした。やがて半道も歩いた頃、一張りのテントを張った国府軍の検問所があり、道行く人々は持ち物や身体検査を受けていた。よく見ると昨夜河べりで私達の荷物検査をした兵士がテント中央の机の前に座っている将校の傍らに立っていたので、一行の方達を道路脇に待たせるとテントに行き、中央の将校にくだんの兵士を指して「私

達はあの方に検査をして貰ったのですが通ってもよいですか」と言うと言校は一瞬きよとんとした。兵士に検査の有無を確かめると私達を通してくれた。

木影一つない強い日差しの広野の中を歩くことは砂漠の中を歩くに等しい。一同の人達の足取りも重くなり、やがて日は西に傾き、夕闇も迫ろうとする頃、うつむき加減に重い足をひきずっていると「早く行け、すぐ汽車が出るぞ」と言う声に、ハツとして顔を上げると銃を肩にした兵士が立っていて、百メートルほどの前方には列車が止り人だかりがしていたので駆け出し息せき切って辿り着くと、丸太を組んだ急造の仮設ホームに貨客車混合の列車が止まっていて、中国人達が奔めき合っていた。

一番しんがりの私達には、国府軍兵士が貨車の扉を開けて乗せてくれ、皆が乗り終えると列車は途中停車することなく走り続け、やがて新京駅に到着した。駅舎に入って「今晚ここで一夜を明かそう」と話し合っていると折よく長春日僑善後連絡処の方に出会ったので事情を説明し「泊めて貰えるところはないか」と尋

ねると「今夜は夜も更けておりどうにもならないが明日迎えに来るからそれまでここにいてほしい」と言うので駅舎の片隅で一夜を明かすことにした。

#### 新京での難民生活

翌八月二日朝、迎えに来た日僑連絡処の方に伴われて、南新京駅近くの平屋建の家が並んだ官舎街のようなどころへ案内され、五軒の家を私達の宿舎に当てて下さり引き揚げ列車の人員が揃うまで待たねばならぬことや預金通帳や満州国で発行した債券類は日本に持ち帰り出来ないの、日僑連絡処で預けることになっている旨の説明をした後今後の連絡は代表の方にするから代表者一人を決めると共に名簿を作って置くようにと言って帰って行かれた。

午後になると、日僑連絡処の方から精白した高粱や野菜類が届けられ、一同の者は久し振りで手にする野菜に歓声を上げ、夕餉には早い時刻ながら宿舍前で賑やかな飯盒炊さんが始まった。翌朝目が覚めると身体が気だるく、腹の調子が良くなり、下痢が始まり、皆が朝食を食べる頃には益々下痢が激しくなったので絶食

することにした。

こうして丸一日絶食した甲斐あって、翌四日昼頃から下痢も止ったので夕食から味噌汁を少し口にしたが、この二日間の体調の崩れを取り戻すのに倍の日数を要した。この間他の人達はそれぞれ何等かの仕事を探し、一生懸命に働いていたが、私にはその気力もななく、所持金も底をついて来たので、妻が中国人の家の洗濯や掃除等の雑役の仕事をみつけて働いたが、この頃には物価も高騰していて、妻の日当十五円の稼ぎでは二人の生活を支えるのがやっとだった。体調の整う間、牡丹江や寧安県から避難した方達の消息を尋ね廻り、偶然寧安県警務科にいた貞島氏に出会い、牡丹江省警務庁無電室長だった木村氏が、ソ連軍に逮捕されたと聞かされ愕然とした。

八月も十日頃になると体調も元に戻ったので、林田氏や金戸氏等と中国人商家の雑役等として働いていたが、十五日頃より南新京駅で引き揚げ用列車の側板取付作業に従事した。南新京駅へ作業に通い始めて四、五日ほど経ったある日、一本の引き揚げ列車にハルピ

ンの白雲隊舎収容所にいた面々が乗っており、期せずして双方からどよめきの声が上がったが語り合う間もなく「お元気で」「お先に」の声を残して遠ざかって行った。私はその遠ざかり行く列車を見送りながら「これで良かった」と一人心の中でつぶやいた。

自分の前職が故に祖国への帰還を目前にしてソ連軍より収容所の搜索を受け、何の関係もない人々に禍の及ぶのを避けるため、白雲隊舎を後にしたが、彼の人達のこととは何時も心の奥底に引つかかっていた。だが今こうして元気に引き揚げて行く姿を見て胸のつかえが取れた思いだった。

南新京駅での作業も終りを告げた三十日宿舎に帰ると、日僑連絡処の方が見えられ「帰国の編成も終り九月三日南新京駅よりコロ島に向かって出発する。皆さんは第一大隊第二中隊第三小隊で五十人全員が第三小隊で、小隊長は山崎さん。なお三日は午後一時までに駅に集合して下さい」と言って帰られた。

祖国へ向かつての引き揚げの日が決まったことでその日が待ち遠しく一同の人達は九月一日までには出発

準備を終えて指折り数えていた。二日の午後皆で一か月間世話になった宿舎内外の清掃をして僅かの白酒で乾杯したが、その夜はなかなか寝付かれなかった。

#### 引き揚げ開始

九月三日午後三時、私達を乗せた引き揚げ列車は南新京駅をコロ島へ向けて出発し、翌四日正午頃コロ島に到着、現地係員の案内で「輸送船が入港し出港準備が整うまで暫く滞在して貰います」と言われてバラツクの宿舎に入り、為すこともなく日を過していたが九月十二日輸送団本部より「明十三日朝乗船する」と告げられ誰の顔も綻びを見せていた。

十三日の朝宿舎前に出ると、誰れ言うともなく「乗船する前に厳しい身体検査があり、特殊技術を持つている人は残される」と言う話が伝わって来たが、その真偽を確める時間的余裕はもうない。私は宿舎裏の木の根元へ駆けて行くと腹巻の中に入れてあった無線通信士の免許証を取り出し、マッチを摺って火をつけ燃え尽きるのを見届け棧橋のところで、私を待っている一同のもとへ駆けつけた。

並んでいる隊列に加わり、妻が何か言いかけた時、ソ連軍の詰所になっている建物の方から「ヤマザキ」と呼び出されソ連軍将校に連れられて詰所内の五、六人の将校が座っている机の前に立たされ、中央に座っている将校が東洋人の通訳を介して「お前が山崎か」「間違いないか」「満州で何をしていたか」等と机の上の書類と私を見比べながら訊問して来たが、私は一貫して「開拓団にいた」と言い張ると、一人の将校が私の横に立って背比べをして見たり、頭の天辺から足の爪先まで眺め廻し、通訳を混えて囁き合う等していた。

通訳が「手を見せて下さい」と言うので一年間の労働でささくれ立った両手を前に出して広げて見せると、こもこもじっと見ていた。暫くして中央の将校が溜息まじりに「エタ、マリーンキ？パジョーム（子供か？行け）」と言ったので私は呆気にとられてぼかーんと突立っていると通訳が「終りましたお帰り下さい。」と言ったので部屋を出た。

私はハルピンに着いた日から姓は山崎でも名は本名

を使っていなかったし、小柄の上に頭は丸坊主だったので、頑丈なソ連兵から見れば子供に見えたのである。一同の人達が並んで待っているところへ戻ると、一様にほっとしたようでごやかに迎えてくれたので「さあ乗船だ」と威勢よく一同を促してタラップを登った。

出港準備が終ると船は霧笛を鳴らし、静かに岸壁を離れ波穏やかな港内を滑るようになって進み出した。甲板に出て遠ざかり行く大陸を見つめながら、避難途中に示してくれた中国の人々の温かい心遣いや、幾多の人々の善意と協力を助けられて乗り越えて来た苦難の道程を振り返り、命の尊さを噛み締めると共に、幾多の辛酸を嘗め、故国への帰還を夢見ながら、不幸にして倒れ逝った数多くの人々や、我が長男の不憫さに胸を熱くし、又軍人や一般民も含めてソ連に連行された者七十万と云われていた中には、渡満以来世話になった先輩や同僚達がいるであろうことに思いを馳せ、奇しくも今自分が故国に向かいつゝ、あることに無量の感慨を抱いていた。

こうして昭和二十一年九月二十二日博多に上陸二十七日夜、我が故里に帰り着いた。

#### 引き揚げ後の暮らし

故里に帰り着いてからは気の緩みから暫くの間は体調を崩していたが、幸い両親も健在だったので、実家で静養させて貰った後、山仕事や野良仕事の手伝いをしていた。何分にも故里は山間の寒村で冬は雪深く、外での仕事は出来ず、「ジョウボ」と云う木葉をご飯に混ぜ、蕎麦粉を掻いて食べる等しながら、炭俵を編み縄をなつて父親に現金に替えて貰い、又春以降は薪を作り炭を焼く等して生計を立てていたが、昭和二十二年七月石川県警察官として奉職した。

だが着の身着のままの裸同然の引き揚げ者の身では、肌を覆う物も賄わなければならず、月々の給料だけでは破産寸前まで追いつめられることもあり、休日には山に向向いて薪作り等して暮らしを支えていたが、我が国の発展と共に生活も安定し、昭和五十四年春定年退職するまで大過なく務めさせて戴いた。

#### 執筆者の横顔

昭和十四年頃の日本は科学技術の勃興期であったので、無線電信を学ばんとする青少年が多かった。

しかし当時は、無線電信技術を学ばんとする者に対して指導者が少なかった。従って全国の技術者養成学校の中で、東京の中野高等無線電信学校は、最優校であったところから若人の憧れの学校であった。

この学校に入学の登竜門を突破したことが山崎氏の人生をきり開く基盤を自らの力で築いた努力型につくりあげた。

大学は出たけれど就職至難な時代に、新興満州国政府の技術兼警察官併用の本官に、見事採用された山崎氏は、少年時代から夢を描いた、奥長白の嶺清き牡丹江省公署に勤務となった。

職場には同僚百人の中に日系官吏は六人だけ、その外は満系職員であったところから、言葉覚えねば、せつかくの誠意が通じないとさとり、ただちに同僚の満系職員から教えをうけて満州語の学習につとめ、昭和十七年には四等通訳になり得た。

彼は、自分の周囲の人々は、みな私の教師であると、

言ってきた山崎氏の人格を満系職員からまで絶大な信頼をうけて、鋭意国境警備の重責を果たしていた。

この、日満協和で平和な建国に精進していたが、昭和二十年八月、ソ連軍の不法にも満州国に侵攻、言語に絶する悪逆無道の日本人に対する暴挙に遇った山崎氏は、多くの官吏家族と民間人を引き連れて北満の山岳河川を渡って避難行軍が続く、途中、多くの戦死者、病患に倒れる中で、終始一貫して多くの避難民の食糧等の入手に奔命神業の如く立ち働いた。

しかも避難中、ソ連人の同僚警察隊長から一緒に避難させてくれと依頼された如く、満系からもソ連系の同僚からも信頼された山崎氏の人となりが見えるのである。

疲労困憊した彼は発疹チフスで病床にあつたが、その間幼児の長男死亡にあう。悲傷限りなかつたろう。

さいわいに、故里に引揚げて昭和二十二年に石川県警察官に採用され、牧民官として親しまれ同五十四年、定年退職まで勤務し、平和な幸せな家庭を営んだ。

彼は、持ち前の犠牲的な世話役が地域の人々から親

生まれ、町内会長、老人クラブ会長、日中友好協会の常務理事、中国残留孤児の身元調査、中国留學生の身元保証人等々の複雑多岐な役職を引きうけて献身的な働きをしている。引揚者リーダーとしての範を示している。その日常行動は神々しくさえみえる山崎氏の姿である。

（石川県引揚者厚生同盟

会長 久木 孝作）